

学校名	北海道教育大学附属釧路義務教育学校	執筆者名	澤田康介
研究タイトル	「防災」の視点で地域を見つめ直す社会科授業 －世界とつながり、地域とつながる防災学習単元の開発－		

① 育てるべき資質や能力・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。(1 ページ程度)

主に育成すべき資質/能力のキーワード 持続可能な社会づくり、防災教育、地域教材開発

主題設定の理由と育成すべき資質や能力

2011 年に発生した東日本大震災(東北地方太平洋沖地震の発生による災害)が学校現場に与えた衝撃は大きく、我が国において、改めて学校防災の在り方を考え直す機会となっているとともに、今後の復興に向けて心身ともにたくましい人材の育成が求められている。また、学校施設が周辺地域に果たすべき役割等についても一層重視されてきている。

2022 年には、釧路市民にとって衝撃的なニュースが報道された。「千島海溝」と「日本海溝」で巨大地震と津波が発生した場合の被害の想定を北海道が公表した。(図1) 道東では甚大な被害が想定され、釧路市では津波による死者が最大で人口の半数を超える 8 万 4000 人にのぼるとされている。これらの数は、避難を開始するまでに 15 分から 20 分程度かかり、早めに避難する人の割合が低い場合や、避難ビルなどの一時避難施設が活用されなかった場合を想定している。一方、地震発生後、5 分から 10 分程度で早めに避難を開始し、避難ビルなどを活用すれば、死者の数は 5 割から最大 9 割程度減ると推計されている。そのため釧路市を始めとする沿岸都市では、大津波に対応した防災に取り組むことが急務となっている。また、北海道特有の積雪寒冷地という条件が加わるため、冬期における避難についての対策も必要となる。



図1 巨大地震と津波が発生した場合の被害想定

仁平(2015)は、「避難施設(学校、公共機関、避難マンション)までの距離と経路、自動車による交通渋滞、道路が凍結する場所と時期、地域住民の高齢化と住民同士の繋がりなどを考慮した避難訓練が有効である」と述べており、避難する際の危険等も想定した上で避難訓練をする必要があると考えた。特に、冬期は避難の困難さから大きな被害が想定されているため、日常生活から避難の際にどのような障害があるのか想定することが重要であると考えた。

以上のような理由から、本研究は釧路市の津波被害想定をきっかけとして、地域に根付いた防災教育の実践を構想する。平常時から災害に備えることで災害時に自分の命を守るとともに、安全を確保する自助の力、そして、平常時から他の人や地域の力を育むことを目指していく。

- 【育てるべき資質や能力】
- ①地域の課題を主体的に発見する力
 - ②仲間とともに課題を解決する力
 - ③地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献する力

② **子どもたちの現状**・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握し、収集した確かな情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。(1～2 ページ程度)

防災合宿から見える子どもの姿

本校では、第8学年において1泊2日で学校に宿泊し、避難所での生活を疑似体験する防災合宿を行っている。防災合宿での被害等、場面想定は以下の通りである。

- ・昼食後、釧路地方で震度6弱の地震が発生し、一部停電に伴う信号機不調により、交通障害の発生などの被害が出ている。
- ・津波発生等が考えられることから、保護者はすぐに迎えに来ることはできない。学校が津波の被害から免れる最適の避難所であるため、一晩学校で避難（泊まる）する。
- ・電気、水は使える状況である。インターネットは中継基地が破損したため、一時的に使いなくなっている。朝に復旧する見込みである。
- ・翌朝には交通障害が解消されたことから、土曜日早朝に保護者へ生徒を引き渡す。

この活動において、ただ避難所生活の疑似体験を行うだけではなく、実際に衛星班や食事班などに分かれて避難所運営の活動を行うことや避難所運営ゲームを行うことを通して、避難所運営の仕方・実際に自分ができることなど、活動の前・後で計画の改善策やよかった部分について振り返りを行う。また、避難民が多くなった場合、今回行ったことをどのように発展させていくかを考えさせることで、避難所運営において大切な行動や考え方を学ぶ機会とした。



図2 防災合宿の様子

また、防災合宿の経験をもとに、毎年防災の日である9月1日に本校を拠点として模擬避難所運営を行っている。生徒のみならず、実際に本校近隣の在住の地域の方にも参加してもらい、本番に近い状況で避難所運営を行うかたちをとっている。地域の方と直接関わることにより、多くの方が避難に来た際の対応の難しさなどについて、具体的な場面を想起しながら学んでいる。(図3)



図3 模擬避難所運営の様子

教室の中だけで学びを進めていることに留まらずアルミマットと毛布で一晩を過ごしたり、避難所運営の体験をしたりするなどの体験を通して、災害時の動きや大切にすることについて学んでいる。こうしたダイナミックな学びを通して、それぞれの子供たちが体験を通して自ら問いを見いだそうとする姿が見られている。

防災に関するアンケートから見える子供の姿

第9学年（中学3年）約70名を対象に防災に関するアンケートを実施した。図4の回答からは、「取り組む予定はないが、今後取り組んでみたい」を含め肯定的な意見をもつ生徒が多く見られ、生徒が防災に関する取組について前向きに考えていることがわかった。また、この項目について「取り組んでいる」と回答した生徒の具体的な取り組みの記述を見ていくと、「家族と災害が起こった時の居場所を確認している」「家で防災グッズを用意している」など、「自助」の視点から災害を想定して生活していることがわかった。

一方で課題もみられた。先に述べた図4に関する生徒の記述では、「公助」や「共助」など地域と結び付けて考えている記述が見られなかった。本校では総合的な学習の時間に地域とつながりをもった活動を位置付けていることから、地域と防災について関連付けられる生徒がいてもおかしくないと考えられる。こうした結果から、総合的な学習の時間での学びがその単元だけの学びで閉じていることや地域とのつながりを見出せていない可能性があると考えられる。

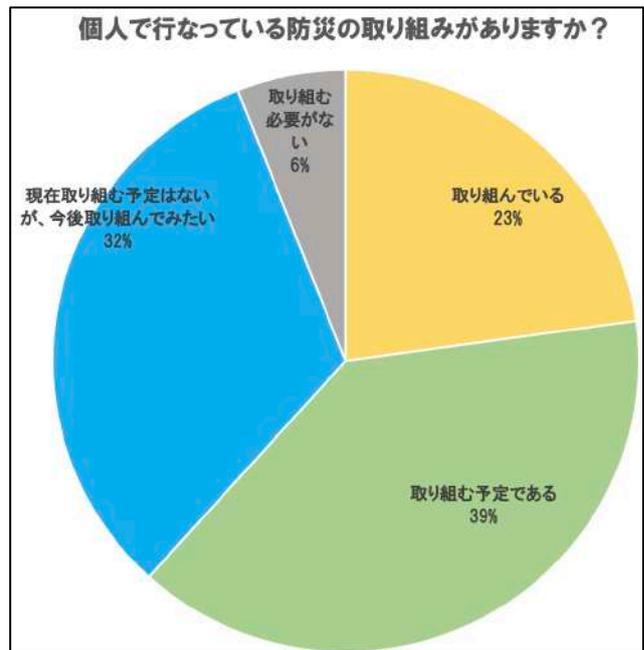


図4 防災に関するアンケート

③ 教育支援の方針・・・子どもたちの現在の状況を踏まえ、過去の実践経験や知見（失敗）なども加えて、教育支援の方針を記述する。（2～3 ページ程度）

授業の手立て～人の営みを通して、仲間と関わりながら社会をよりよくする力を育む～

公民としての資質・能力を育む上で、大切になるのは「人の営み」であると考えられる。社会を創っているのは「人」である。その社会のなかで課題を生み出しているのは「人」であり、その課題の解決に関わっているのも「人」である。社会的な事象を眺めていても、実社会とのつながりは見えず、専門家のようどこか他人事のような社会科授業になってしまうと考える。教師自身が社会と関わり、そこで出会った人の営みを通して、子どもが実社会の課題を解決しようとする姿勢こそが公民としての資質・能力を育むきっかけになると考えている。そこで、単元のなかで「人」を取り上げ、社会の中に潜む課題を明らかにし、課題と向き合う取組や試行錯誤する姿勢を学ぶ。そして、取り上げた「人」や仲間とともに実社会の課題を解決しようとする場面を位置付け、社会と関わる社会科授業を目指す。（表1）

授業で大切にしているもの	仲間と関わりながら、社会をよりよくするために自分なりの考えをもつ
教材化の視点	実社会で課題と向き合う生きる人の営み
「人の営みを通して、仲間と関わりながら社会をよりよくする力を育む」授業づくり	実社会の課題と向き合い、解決しようとする学び ～人の営みを通して社会を見つめ、自分なりの考えをもって社会と関わる社会授業～

手立てを踏まえたこれまでの実践～授業実践「どうする！？津波と冬の避難」の実際～

授業対象者は北海道教育大学附属釧路義務教育学校の第8学年（中学校第2学年）生徒71名である。実施期間は令和5年2月4日から令和5年2月18日である。

(1) 授業実践の主張点

単元「どうする！？津波と冬の避難」は「地理的分野 C日本の様々な地域 (1) 地域調査の手法」に関する授業として計画したものである。この授業づくりで特に重視したポイントは、次の2点である。

1点目は、生徒が防災マップを作成する上で、子供たちの認識に「ずれ」を生むきっかけとしてフィールドワークを位置づけたことである。本校生徒の実態として、釧路市において津波の被害が大きいことは把握しているものの、津波による災害に対して「高台に住んでいるから大丈夫」と発言する生徒も多くいる。そこで、行動しにくい時期である冬にあえてフィールドワークを行うことで、避難の際にどのような危険が想定されるか考えさせる。避難するという視点で、フィールドワークをすることで、実は安全だと思っていた場所が危険だったなど、子供の認識に「ずれ」を生む手立てとしていく。

2点目はフィールドワークを行う上で着目する視点を明確化したことである。池（2012）は、地域調査の学習の課題として、教員の指導が不十分であるために知識や経験の乏しい子供たちが地域のどこに着目して重要な地理的事象を見出せるのか見当がつかない場合が多いことを挙げている。そのため、本単元ではフィールドワークを行う前段階として、冬の避難の困難さを子供たちにつかませた上で、「釧路市では冬の避難の際にどのような場所に危険が潜んでいるのか」という共通のテーマを明らかにする。また、大学で多く取り入れられているエクスカージョン（体験型の見学会）をオンラインで実施することで、実際のフィールドワークの際に主体的に行動できるようにした。

(2) 本単元の学習の実際（全8時間）

① 第1次 被害想定をもとに単元の問いを生み、防災のあり方を検討する

1時間目の導入では、1993年の釧路沖地震の写真を提示した。また、2022年に公表された「巨大地震と津波が発生した場合の被害」の映像資料を提示した。映像の内容は、釧路市の人口の約半数が亡くなるという想定について報道されたものである。この段階の振り返りでは、「津波の避難タワーが釧路にはないので、津波から守るための施設を作ることで、多くの人の命を救える」など、「公助」の視点の記述が多く見られた。以下に生徒の振り返りを紹介する。



図5 釧路沖地震で地割れが起きた様子

- ・映像を見て驚きました。釧路市にはあまり避難所がないと聞いているので、避難してきた人がみんな入れるのか心配になりました。**もっと避難所を増やしてほしい**と思いました。
- ・私の家の周りには高台がないので、どうやって避難すればいいか心配になりました。**津波の避難タワーが釧路にはないので、津波から守るための施設を作ることで、多くの人の命を救える**と思いました。

② 第2次 防災教育アドバイザーとの出会いを演出し、防災のあり方に対する認識を覆す

3 時間目には、釜石市の防波堤を例として取り上げた。釜石市は「安心の砦」と呼ばれていた世界最大深水の防波堤があったにも関わらず、東日本大震災の津波で防波堤はほぼ

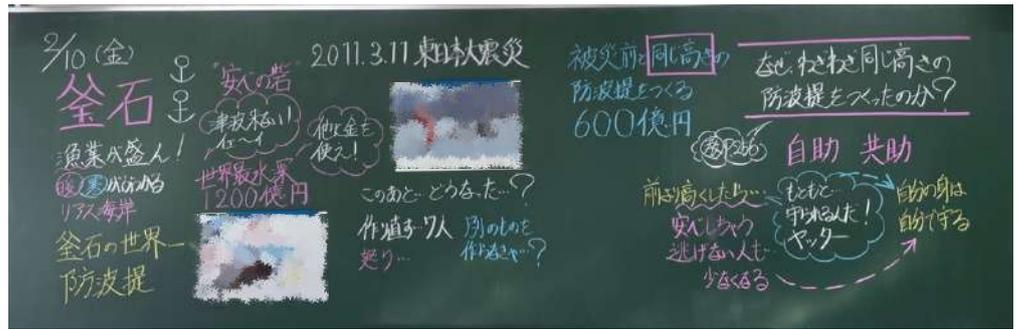


図6 3時間目の授業の板書

全壊し大きな被害を受けた。しかし、日頃から住民に防災の意識を大切してもらいたい思いから、同じ高さの防波堤を復旧したことを取り上げた。釧路市の津波対策を調べるだけでなく、釜石市の事例を取り上げることで、施設のみならず防災の意識などの大切さに迫れるようにした。この時間の振り返りでは、「慢心せずに地震が起きたら逃げるのが大切」「私たちの日頃の意識が大切」など、「共助」につながるような視点の記述が見られ、徐々に自分事になっていることがわかった。

4・5 時間目は、防災に関して専門的な知識を有する北海道教育防災アドバイザーの方を授業に招き、釧路市と津波の関係について、さらに深めていく時間とした。子供たちが考える場面でその都度、防災アドバイザーの方からアドバイスをいただいた。

「公助」である防災の施設づくりだけではなく、実際に避難する場面や避難所での過ごす場面などにおいて「自助」や「公助」の視点が大切になることを伝えていただくことで、子供たちの驚くような姿を引き出すことで、次時の学びへとつなげた。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、北海道防災教育アドバイザーとオンラインでやりとりをした。

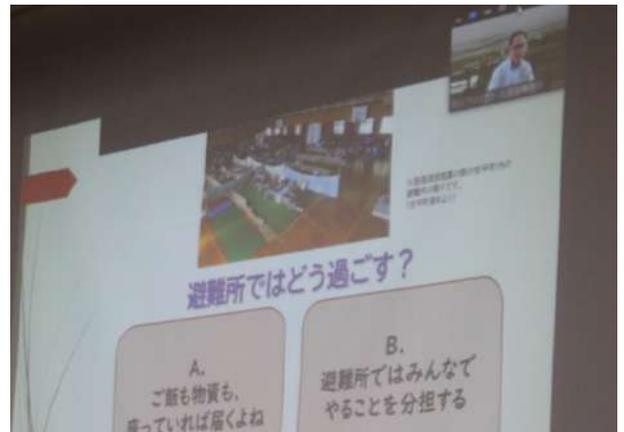


図7 防災教育アドバイザーとのオンライン授業

③ 地域調査を通して釧路市における防災のあり方を見つめ直す

6 時間目には、北海道における冬の避難の課題を解決すべく、避難する際にどのような場所に危険が潜んでいるのかについて冬の時期(2月)のフィールドワークをもとに検証した。実施方法は4人編成のグループでそれぞれが釧路市の別々の地域を歩きながら調査した。例えば、場所による滑りやすさを確認したり、雪による道の幅の狭さや見通しの悪さなどによる避難のしにくさを調べたりした。



図8 フィールドワークの様子

7 時間目は「釧路市「冬の防災マップ」」を作成した。ロイノートや Canva の共同編集機能を活用して、それぞれの地域で撮影した写真を釧路市の地図に関連付けた。図7は生徒が作成した「釧路市「冬の防災マップ」」である。緑色、黄色、ピンク色は津波の浸水

の度合いを示したものである。また、次時の活動である報告に向け、Canvaの共同編集機能を活用してグループごとにスライド資料の作成を行った。実際に冬に避難することを想定し、避難する実際の場面を考えてフィールドワークを行なったことで、高齢者の避難の難しさについて考える姿が見られた。例えば、「高齢者の方たちが一人で避難することや時間をかけないと避難できないのではないか」という難しさを感じていた生徒もあり、4時間目の学びと関連付ける姿が見られた。



図9 生徒が作成した「釧路市“冬の防災マップ”」



図10 生徒が作成したスライド資料①



図11 生徒が作成したスライド資料②

8時間目は、フィールドワークした内容を全体で報告する活動を位置付けた。その際、北海道防災教育アドバイザーの方も参加していただいた。本単元の学習の過程を知っている方から自分たちの学びについてアドバイスをいただくことで防災についての気づきを一層深められるようにした。

(3) これまでの実践からみえる成果と課題

単元の節目である8時間目の振り返りでは、以下のような記述が見られた。

- ・今回冬の防災マップを作成して、身の回りに危険な場所が思っていたよりもたくさんあったことに気がきました。津波の対策として初めは避難所を増やすことが大切だと思っていましたが、施設を作ることだけではなく、授業や防災アドバイザーの方のお話を聞いて、地域住民の高齢化と住民同士の繋がりなどを考慮した避難訓練が有効だと思いました。
- ・防災について7年生の頃から学んでいましたが自分の住んでいる地域の危険な場所を自分の足で調べてみると今まで意識していなかった所に危険があることがわかりました。ハザードマップで可視化してみると殆どの釧路の地域が津波浸水エリアになっていて逃げられる場所が少ないから普段から意識を傾けておくのが大事だと感じました。

子供の振り返りの記述の変容を見ていくと、1時間目は釧路市による津波に対する施設づくりなどの「公助」の視点が中心となっていたが、授業を進めるにつれ「共助」の大切さに気付いた記述が多く見られた。特に7時間目の振り返りの記述に見られる「家族や地域の方と話し合っただけで防災に取り組んでいきたい」という記述は単元の学習を進めていく中で、自分事になっていったことがわかる記述である。

本単元の課題としては、地域の方に向けて発信する場面を位置付けられなかったことが挙げられる。防災教育アドバイザーの方にも協力いただいて学習を進めたが、子供たちが地域の方と一体になって防災の取り組みを進める必要性に気づきながらも地域の方に向けて発信していく場面を位置付けられる活動にすることで、より一層学びがいのあるものにしていきたい。

④ **実行計画と準備状況**・・・「③教育支援の方針」をもとに、自分が「いつ、何を、どのように行うのか」を具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。(3～4 ページ程度)

具体的な工夫のキーワード

持続可能性、地域連携、国際協力、NGO、人の営み、新たな価値を創造する

実践の目的とねらい

本実践は、第8学年（中学校第2学年）の「社会科地理的分野」において、防災の視点から釧路を見つめ直すことを目的として行う。その際、釧路に関する防災について提案・参加していくために、釧路について深く知ることはもちろんのこと、他都市との比較が欠かせないと考えた。そこで、zoom によるオンラインを活用して、海外に拠点を置いて発展途上国などで災害に負けない持続可能な社会づくりを目指す「SEEDS Asia」の方とつながり、外国の取組と比較しながら釧路の防災について考えを深めることができるようにする。

実践計画の内容

(1) 「釧路×アジア～アジアの国々の防災を通して釧路を見つめる～」の教材化の価値

対象学年である第8学年は7月末に「防災合宿」を実施し防災倉庫の物品を使い避難所運営の経験をする。また、9月1日には「防災イベント」を実施し、第7学年と地域の方々に協力してもらいながら模擬避難所

単元について

【知識・技能】

○防災合宿や避難所運営、防科授業の経験を生かし、国内の災害から得た教訓や防災の視点を理解するとともに、釧路や地域で生かされる防災の取り組みを考えながら、地域との関わりから得た学びを踏まえ探究的に学習を進めることができる。

【思考力・判断力・思考力】

○防災合宿や避難所運営の経験から見出した課題のもと、防災の視点から見る我が国や釧路の取り組みの情報収集しながら分析をして、防災の視点からくしろの街づくりを考え、まとめ・表現できる。

【主体的に学習に取り組む態度】

○防災の視点で釧路のまちづくりを見直し、グローバルな視野とローカルな視点で、防災と社会の結び付きについて考え、自己の課題解決にむけて主体的・協働的に取り組もうとする態度を養う。

図 12 本単元の目標

運営を経験している。しかし、こうした学びは学校での学びに留まった「ローカル」の視点である。学びとったことを「グローバル」な視点で釧路地域や国内そしてアジアへと広げていくために本単元を位置づけていく。グローバルな視点に生徒が立った時に、改めて釧路を見つめ、そして経験から見出したことを伝承していくことの重要性を実感させたい。

時	○学習活動
1	○「防災合宿」「防災イベント」を経験し、釧路は防災に強い街と言えるか」について考え、探究課題を設定する。
2	○釧路と他の地域（国内・海外）の防災意識を比較することで、防災の視点で釧路のまちづくりを見直している。
3	○これまでの防災の学習や経験で自分たちが学んだことを発信するとしたらどんなことが大事だと思うかまとめる。
4	○「SEEDS Asia」の方たちが「人」に着目した活動を行っている理由を A さんの話をもとに説明する。
5	○SEEDS Asia の方の話をもとに疑問などを見だし、防災についてどのような内容を発信すべきか構想する。
6	○単元で培った学びを発信するために釧路の方へ向けた防災カードと海外の方へ向けた防災カードを作成する。

(2) 海外で活動する支援団体と生徒がつながることの価値

「SEEDS Asia」は、主にアジアで環境問題の改善や防災並びに災害救援に関する事業を行い、社会全体の持続可能な発展などに寄与する活動をしている。しかし、単に海外で活動する方とオンラインでやりとりしただけでは学びは深まらないと考える。生徒の実態として、単元の序盤における

記述から「避難タワーや防波堤を建設する」などのハード面に目を向けると考える。その一方で、

「SEEDS Asia」は、アジアそれぞれの地域の防災施設の建設のみならず、現地の人々に防災に関する知識を伝えることで「防災文化」を広げていく存在を育てる「人づくり」に力を注いでいる。こうした取組を通して、釧路においても構造物の建設だけではなく、人の営みに着目できるようにしていく。

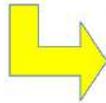
こうして海外で活動する「SEEDS Asia」の方の思いや願いに触れることは、SDGsの達成との関連も強いと考える。特に、「目標11 住み続けられるまちづくりを」との関連は、改めて災害に強いまちづくりについて再考する視点とつながると考える。「SEEDS Asia」との出会いを通して、子どもたちは災害に強い街とは、災害が発生しても耐えられる建物が整っている街だけではなく、地域の人々との関わり合いも踏まえながら生命や財産を守ることができる街なのだ気付く姿を目指したい。

・避難所運営の経験を基に、地域と連携して課題にどう対処していくことが大切であるかを見出す活動を位置づける。



防災の視点と災害時に地域とどのように関わり行動化・行動力が必要であるかについて、我が国の災害時の教訓を基に地域に目を向け、どう関わっていくべきかを考えることができる。

・SEEDS ASIAが取り組んだ日本の防災の考えをアジア諸国に伝えてきた活動を通して、我が国の役割について学び、釧路という地域としてどういった貢献ができるのかについて考える活動を位置づける。(指導計画4時間目より)



目指す児童生徒の姿「よりよい未来に向けて、仲間と共に主体的に行動・発信しようとする児童生徒」にせまることができる。

 11 住み続けられるまちづくりを	<ul style="list-style-type: none"> ・目標11 住み続けられるまちづくりを 包括的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する。 キーワード: 国土保全、防災、地方創生
 17 パートナーシップで目標を達成しよう	<ul style="list-style-type: none"> ・目標17 パートナーシップで目標を達成しよう 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。 キーワード: 協働 リーダーシップ・フォロワーシップ

(3) 防災学習单元「防災の視点で釧路を見つめる」における実践計画

地域のよさを見出し、魅力あるまちづくりへの学習を重ねてきた上で、地球変動による地震等の被害が想定される釧路地区において、防災への意識や日本の防災の視点を、自分の身近な問題として捉えられるようにする。そこで、単元の1時間目には、子ども

地域のよさを見出し、魅力あるまちづくりへの学習を重ねてきた上で、地球変動による地震等の被害が想定される釧路地区において、防災への意識や日本の防災の視点を、自分の身近な問題として捉えられるようにする。

防災合宿での経験や、避難所運営での経験をもとに、防災の視点で自分としてのつながりを感じることができる学習活動を工夫していく。



地域の課題を地域の強みとして捉え、主体的に地域内外に行動・発信する児童生徒を育成することができる。

たちがこれまでに経験した「防災合宿」「防災イベント」をもとに、釧路は防災に強い街と言えるか」について考え、疑問点をまとめ、探究課題を設定する。(図13)

1時間目
「防災合宿、防災イベント」を経験し、釧路は防災に強い街と言えるか」について考え、疑問点をまとめ、探究課題を設定する。

授業の実際について

防災合宿や防災イベントの経験を引き出す

自分たちの住むまち(釧路)の防災が強い・弱いについて予想し、交流する

情報の共有
笑顔
避難所運営 大変
状況判断
臨機応変
避難時の動き

防災の視点で釧路を見つめる
防災合宿や防災イベントを通して釧路の防災について考えよう!

北海道・意識高い...
釧路の実地...
みんものノウハウを
どうやっておりゃ
もたない!!

釧路は...
防災に強い? 弱い?
高台か
たいていある?
避難場所か...
防災の話も
聞いたことが...

「防災の強い
まちには?」
防災合宿と他の学校
で行った
文芸・川筋
イベント
避難所運営
がわかる...

釧路市民が防災の意識が低いことを提えううえで、自分たちが学んだノウハウを伝えたらよいのでは!?!という思いをもつ

図13 1時間目の授業構想(板書計画)

2・3時間目には、釧路と他地域(国内・海外)の防災に関する取組を比較した上で、自分たちが学んだことを発信するとしたらどんなことが大事だと思うかこの段階でまとめさせていく。(図14)

3時間目
これまでの防災の学習や経験をもとに、自分たちが学んだことを発信するとしたらどんなことが大事だと思うかまとめる。

世界と比較してみると、日本の防災はどうなのだろうか...?

日本と共同しながら防災に取り組んでいる国もある

全日本と
日本の他県とを
比べると...

海外とやっていると
大きく変わる!

味と
オリジナリティ
工夫している
県もある!!

日本と外国の防災を比較して見るとどうなる?

シンガポール
インドネシア
スリランカ

地震、津波
ほか

韓国 耐震
マレーシア 14日間の防災
モルバ 普段の生活と同じはOK

進んでいる
遅れている

日本か!
地震大国
いろいろな取組
経験
韓国・日本来て
アジア

日本と共同
救助

日本と共同
協力

韓国・日本来て
アジア

同じ学習や経験で
学んだことを発信するのは...?

韓国・建物弱い...
復興におそい...
オーストラリア
一度災害...
被害大?

どうやら日本全体として見ると、防災は世界に比べて進んでいるようだ
防災が弱い地域にどんなことをつたえたらよいだろう?

図14 3時間目の授業構想(板書計画)

4時間目はオーストラリアに在住して活動するSEEDS AsiaのAさんとオンラインでつないでいく。SEEDS Asiaでは「人づくり」を大切にしているという話をAさんから聴くことで生徒の思考のずれから問いを生んでいきたい。また、5時間目も別日にAさんとオンラインで繋ぐ。この時間には、SEEDS

「被害を少なくするためにどんな対策をしたらいい?」

「家が木でできていて弱そうだから、強度の強い家をつくったらいい!」
「避難できるように、高い建物を作ったらいいんじゃないか?」

Asia の取組や A さんの思いについて質問や意見を述べる時間を取り、一人ひとりの問題意識についての考えを深めていく。(図 15)

4時間目(本時)

SEEDS Asiaが実施しているアジア諸国に向けた防災教育について知り、我が国の防災の視点が様々な地域で生かされていることを学ぶ。その上で、考えたことや質問等をまとめる。

A さんの話をもとに、災害に対してどのような取組をしているのか知る




「東日本大震災や阪神淡路大震災の教訓がフィリピンでも生かされているんだ」
 「災害を語り継ぐ経験がなかったから、災害の経験を伝えられるように人に着目」

図 15 4 時間目の授業構想 (板書計画)

単元末である 6 時間目には「提案・参加」の場面として、防災について大切なことをキーワード化した「防災カード」を作成する。釧路の人に向けて、交流を通じた学びを発信するとともに、A さんを通して海外の方に思いを馳せることにより、「フィリピンなどの現地の人にも伝えたい」という思いを醸成できるようにしたい。そこで、英語の学びを活用して「防災カード」を作成し、SEEDS Asia の方たちを通して現地の方に伝えていくような活動を位置付ける。(図 16)

[Keyword] Cooperation



[Explanation]
I think that cooperation is necessary !

[Keyword] Help each other



[Explanation]
It is important to help each other when it is difficult.

図 16 生徒が作成する防災カードのイメージ

終わりに

地域調査の学習は単元の性質上、生徒と地域が関わり合うダイナミックな実践ができる単元である。今後も、子供たちが釧路市の魅力や課題と向き合い、子供たち自身が問いをもって学習できるような実践をおこなっていききたい。

【参考文献】

- ・NHK(2022)『釧路市・人口の半数超が死亡!? 道東・市町別被害想定を詳しく』
<https://www.nhk.or.jp/hokkaido/articles/slug-nc444034075c5>
- ・仁平尊明・橋本雄一(2015)『釧路市における自主防災組織の活動から見た津波避難の課題』、地理学論集 vol. 90、p1-14.
- ・池俊介『地理教育における地域調査の現状と課題』(2012)、E-journal vol. 7、p35-42
- ・加賀美雅弘・荒井正剛編『景観写真で読み解く地理(東京学芸大学地理学会シリーズⅡ第3巻)』、古金書院
- ・由井蘭健『一人ひとりが考え、全員で作る社会科授業』、東洋館出版社
- ・唐木清志『「公民的資質」とは何か ―社会科の過去・現在・未来を探る―』東洋館出版社、2016年
- ・荒井正剛編『中等社会科教師の専門性育成』学文社、2022年